



学校法人 電子開発学園

北海道情報大学



2010年
6月発行
Vol.5

教育GPニューズレター

Hokkaido
Information
University

巻頭言

FDとPD

先端経営学科長

中村 忠之

IT関連企業に勤務していましたが本学に着任するため30数年ぶりに北海道に戻って来て早くも5年経ちました。企業では営業部門にも在籍しましたが、およそ3分の2の期間は開発部門で製品の企画やマネジメントをやってきました。外資系の企業だった事もあり、本学への着任当初はまさに異文化、異次元の世界に飛び込んだ日々でした。

しかし、仕事に慣れ、教育の現場を知り、本学のFDにかかわるようになってから教育と製品開発(PD:Product Development)は同じような仕組み、プロセスではないかと思うようになってきました。教育は第三次産業のサービス業と考えられ、IT産業は最近ではサービス業への変革を遂げていますが、製品の開発はまさに第二次産業の製造業と同じです。ご存知の様に、製品開発は簡単に言うと①企画を立て②製品の仕様を固め③開発計画を立て④開発要員を確保し⑤設計・試作・テストを繰り返して開発し⑥資材を調達して生産し⑦お客様に出荷をするプロセスです。大学教育も大学の理念・建学の精神の下で、アドミッションポリシーを明確にし、シラバスを作り、学生を募り、教育というプロセス

を経て学士力のある人材を社会に送り出すということをしていて、「製品」と「人材」とアウトプットは異なりますが、プロセスは製造業と似ているのではないかと思います。

製品を世に出すにあたって一番大切なことは“品質”であることはいまでもありません。大学教育の分野でも多様化する学生が増えるにつれ「教育の質の担保」、「学士力の向上」など教育の質の向上がいられています。品質の向上には上述のプロセスの改善とそれに関わる社員の質の向上が重要で、これが大学教育ではまさにFDそのもので、授業内容や教育の改善・向上への組織的な取り組みが教育の質、ひいては学生の質の向上に寄与すると考えられます。IT業界にはプロジェクトマネジメントの資格として世界に通用するPMP(Project Management Professional)が有名ですが、この資格は何もIT業界のみに通用するのではなく製造業や建設業などの大きなプロジェクトのマネジメントにも適用されています。教育をモノづくりと言っては語弊があるかもしれませんが、社会で評価されるモノを世に出す考え方やプロセス、マネジメントの仕方は大学教育の現場にも当てはまるのではないかと思います。その他にも産業界では社会の変化に対応すべく顧客の視点に立った様々なイノベーションに力を入れていますが、これらの手

目次

1. 巻頭言	1
2. 教育GPシステム開発会議の活動報告	2
3. 学生FD活動について	4
4. 平成21年度の活動報告	
WG 1	6
WG 2	7
WG 3	8
WG 4	9
WG 5	10
WG 6	11
WG 7	12
WG 8	13
WG 9	14
WG 10	15
5. FD活動 行事(実績・予定)	16
6. FD委員会WGの活動実績	16
7. 編集後記	16

法も教育現場にそのまま適用できると思います。つまりFDもPDも相通じるところが非常に多いのではとの感を強くしています。

企業で経験したこの様なマネジメントのやり方をFDにも生かしたいと思っておりますが、入社した頃、上司によくいわれたことは開発部門というのは開発した製品が市場に存在する限りその製品に責任を

持つということで、まさに“ゆりかごから墓場まで”面倒をみなければいけないということでした。教育も学生の生き方に影響を与え、我々はその学生にとって一生、先生と言われる立場になるわけで、その責任の重さを痛感せずにはいません。“製品の品質”や“教育の質”の改善・向上も突き詰めていくと結局はそれに携わる人間

のメンタリティに大きく依存すると思います。本学ではすでにFDのツールと仕組みが出来上がりつつあります。それをいかに深化させるかは我々教員に課せられたこれからの活動次第であり、FDを通して社会に役立つ人材の輩出に努めようではありませんか。

教育GPシステム開発会議の活動報告

教育GPシステム開発会議の役割およびメンバー

本会議は、FD活動の推進に欠かすことのできないコアシステムであるFD支援システム『CANVAS』の開発を主に、本学がFD活動を推進していくためのICT面での支援や、教育GP事業の推進を主なミッションとして活動をしています。

主な構成メンバーは本学教職員と、隣接するメディア教育センター(MEC)の技術職員であり、システム開発には本学学生8名も加わっています。

教 職 員	富士 隆 副学長
	藤井 敏史 教授
	谷川 健 教授
	山北 隆典 教授
	市川 泉 情報センター事務室長
M E C	恵藤 健二 副センター長
	安倍 隆、前田 諭
	前田 真人、平野 雄一

主な活動内容

平成20年11月から活動を開始した本会議は、ほぼ1週間に1回のペースで精力的に会議を開催しており、プロジェクト2年目を迎えた平成21年度には、主に次のような活動を行いました。

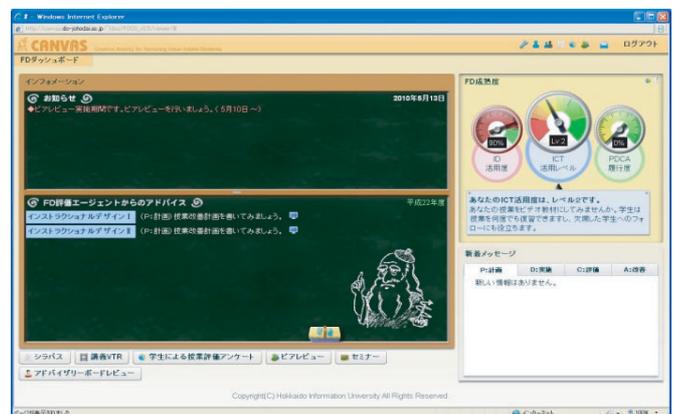
(1) FD支援システム『CANVAS』の開発

CANVASは授業改善のための様々な情報をPDCAサイクルに従って半自動化して提供し、教員がより良い授業を行う手助けをするシステムです。

平成21年度には一部の先生方の協力をいただきながら評価・改修を繰り返し、今年4月からは全教員

の皆さまにお使いいただける状態となりました。

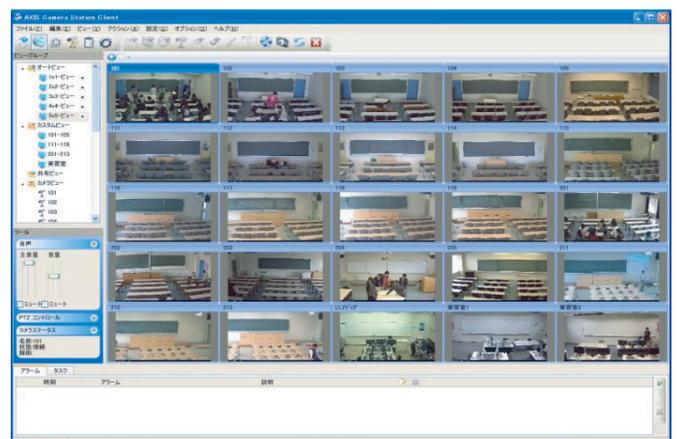
CANVASはこれからも進化していきますので、ぜひ多くの先生方にお使いいただき、改善意見を頂戴したいと思います。



(2) 講義録画システムの導入

CANVASでは全ての授業の様子が自動撮影され、その映像はCANVASを利用して教員がいつでも視聴できるようになっています。自分の授業を振り返ることで、授業改善のきっかけとなることが期待されます。

平成20年度には12教室分だった設備も、現在は26教室に加え、ゼミ室を除く全教室が網羅されています。



(3) クリッカーの導入・活用支援

学生からの応答を即座に集計できるクリッカーシステムを、4セット（約200端末分）導入しました。

学生を飽きさせない・授業に集中させるのに効果があり、利用した先生からも好評です。使い方も簡単ですのでぜひ利用してみてください。



(4) プラジャリズム(剽窃)防止ソフトの導入

学生のレポートが、インターネット上のサイトからのコピー（剽窃、盗用）であるかどうかを判断するのは難しいことです。それらを自動的にチェックするシステムを、学内のLMSに組み込んで利用できるようにしました。

LMSを利用してレポートを提出させることで、半自動的にチェックが行えるようになりました。



(5) ICT研修会の支援

WG4が開催しているICTやIDに関する研修会の様子をビデオ撮影して、本学LMS「POLITE」からネット上で視聴できるようにしています。

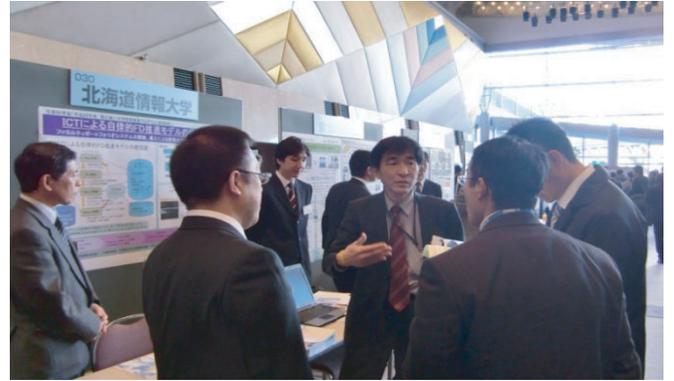
見逃してしまった方は都合の良い時間にぜひご覧ください。



(6) 本学FD活動の学外へのアピール

本学のFD活動およびFD支援システムを、対外的にも積極的にアピールすることを心がけています。

平成22年1月7日と8日には東京にて開催された「大学教育改革プログラム合同フォーラム」（文部科学省主催）のポスターセッションに参加しました。



また平成22年3月5日には本学で「教育GPフォーラム－教育力の向上で広げる可能性－」を開催しました。

（詳細はWebサイトや広報誌（Vol.48）をご覧ください）

今後の活動

平成22年度はCANVASの全教員による試行がスタートしています。多くの先生方にご利用いただき、教育の質の向上に役立てていただくよう、教育GPシステム会議では万全な態勢で技術的な支援をしてまいります。

何か困ったことなどありましたら、どうぞお気軽にCED（e-Learning推進センター）の分室にお越しください。

（メディア教育センター 安倍 隆）

学生FD活動について

上杉 正人 (医療情報学科)

学生FDを簡単に説明すると、学生とともに授業や学ぶ環境を改善していく活動である。つまり学生と教員とが一緒になってより良い学習の場を作っていく活動である。学生FDの取り組みが先行する立命館大学の例を手本にして、昨年2009年に始まった。立命館大学は3万人を超えるマンモス校であるのに比べて北海道情報大学の学生数は2000人弱であり、公募による短期間での学生の参加は難しいと判断し、教員が学生に参加を呼び掛けた。すべての学科から学生が集まり、内訳は経営ネットワーク1名、システム情報2名、医療情報2名、情報メディア4名であった。

<学生FD会議>

第1回の学生FD会議は12月16日の昼休みに開催した。会議では学生FDの趣旨を説明し、今後の取り組みについて話し合った。2010年3月までに何らかの結果を出せるような、無理のない活動テーマの検討を行った。情報メディアグループは自分たちがよいと思う先生へのインタビューを行うことを目標とし、経営ネットワーク、システム情報グループは授業アンケートへの先生のコメントを調べ、改善点などの調査を決めた。また、医療情報グループは学科内のゼミを訪問してゼミの方法などを調べてまとめるといったテーマで決まった。

<活動の開始>

本格的な活動は2010年1月からになり、3年生の経営ネットワークの大久保君やシステム情報の氏家君は就活など4年生に向けて忙しい時期であり、また医療情報の井内君、土井君は病院実習期間に重なっていたため十分に時間がとることができない中での活動であった。ここで

彼らの活動の一部と彼らの感想などを紹介する。

<グループ1>

氏家君、大久保君らは授業評価アンケートを調査した結果谷川先生と木村先生の2名の先生に興味を持ちインタビューに訪問した。谷川先生は授業評価アンケートの結果に対して、「授業改善の必要なし」とコメントが書いてあったためどのような授業展開なのか聞くため訪問した。そこで、講義の工夫に対する谷川先生への質問では、“授業展開は、1・2年生は全体に合わせた授業展開で、わからないことがあれば丁寧に教えるよう努め”、“3・4年生は、自分で考えるような授業展開を行う”という回答を得た。また授業改善については“「教える」といった勉強方法ではなく、「考えさせる」ことを主体の勉強方法にした”という工夫について聞くことができたようだ。

次に学生らは木村先生を訪問した。木村先生は昨年赴任したばかりで新しいことが聞けるのではないかと研究室を訪問し、この大学の感想を聞いている。木村先生は“思っていたよりも、学生が真面目”であるという評価で、講義の工夫については“(板書により)ノートをしっかり取る習慣をつけさせること”などの工夫をしていることを聞くことができた。

今回の活動を通して学生らは“講義を意欲的に工夫している先生が多いこと”を知り、今後“少しでも今後の授業改善の参考になるよう、アンケートを真面目に書きたいと思った”と感想を述べている。



<グループ2>

医療情報グループの土井君はゼミ担当の教員を訪問することにより、“関わりが少なかった方（先生）ともお話できて色々な情報を得ることができた”ことが述べられ、また、井内君は“ゼミ担当教員の中には、顔も名前も知らない教員もいました”が“どんなゼミなのか教員がどんな人なのかを知ることができてよかった”と感想を述べている。



実際2年生まで講義を受けたことがない教員のゼミに入ることは非常に不安が大きいと思われる。そもそも教員の顔と名前、そして何を専門にしているのか、そして先生の雰囲気などまったくわからない状態でゼミを選ぶのは学生にとって難しい選択である。

今回、こうした問題を少しでも解消できればと2人の活動が始まり、ほとんどの先生方にインタビューができたが、すべての先生へのインタビューはできなかった。そのためゼミを紹介する資料は完成にまで至らなかった。この点は今後引き継がれていくと思われる。また、ゼミ訪問を受けた先生側の立場からすると、学生目線で先生の雰囲気も含めたゼミをアピールするよい機会になったと思われる。

<まとめ>

学生FD活動はほぼ目標を達成したと思われる。また、学生FD活動を通じて感じたことが次のように述べられている。“関わりが少なかった方（教員）ともお話できて色々な情報を得ることができたこともおおきな収穫でした。”そして“後輩達にもぜひ委員会を引き継いでもらいたい。”と今後のFD活動の発展を願う感想が述べられている。さらに、より多くの学生と教職員が交流できる場である「しゃべり場」の開催の提案をしている。

短い期間ではあったが、学生FD活動を通して学生も教員もそれぞれの立場で意見交換することができ、学生がより詳しく先生を知るよい機会であった。

昨年12月からの学生FD活動は僅か4ヶ月ほどの活動であったが、小さな成果が積み上げられてきていると思われる。今後、学生の主体的な取り組みを教員がサポートすることで活動の輪が広がっていくことを期待したい。



WG1：学生による授業評価アンケート

リーダー 藤井 敏史 (情報メディア学科)

WG1のミッション

授業に関する学生の声を収集して、授業改善につなげるしくみを検討する。

WG1のメンバー

教員：藤井、穴田、中島、上杉

事務職員：近藤、木田、市川

活動内容

(1) 授業評価アンケート

2009年度は、前期、後期ともにwebアンケートシステムを使用して授業評価アンケートを実施した。2008年度後期に初めてweb上で実施した経験を踏まえてほぼ円滑な運用が確立されつつある。

なお、アンケートの実施に先立ち、アンケート項目の見直しを行い文言を統一した。また、対象科目として、再履修科目、集中講義科目、教職に関する科目を加えた。

検討課題として、アンケートの回収率の改善がある。前期、後期とも、回収率は従来のアンケート用紙を使用した場合の約50%であった。

(2) 表彰制度

第1回「学生が選ぶ教え上手な先生」として表彰された松井先生に講師をお願いして、授業のノウハウに関する講演会を実施し教職員32名が聴講した。

また、2009年度は、後期の授業評価アンケ

ートと同一時期に第2回「学生が選ぶ教え上手な先生」の投票をweb上で実施した。その結果、坂本先生が最多得票を得て表彰されることになった。

(3) リアルタイムアンケートシステム

毎回の講義単位に学生の声を収集することができるシステムである。学生は携帯電話かパソコンを使用して回答する。

システムの動作確認を行った後、後期から運用を開始した。使用説明書を作成・配布して教員への周知を図った。

(4) 学生FD

立命館大学をはじめとして、多くの大学で学生の意見を取り入れたFD活動（以下、「学生FD」）が展開されている。本学のFD活動に「学生FD」を導入することを検討して表1に示す結論を得た。すなわち、他の手段では得難い学生の声の収集が期待できる。

学生への参加呼びかけの結果、9名の学生から同意を得ることができ、12月から「学生FD」の試行を開始した。9名が3つのグループに分かれて活動している。

平成22年度の活動予定

授業評価アンケートおよび表彰制度に関しては、定常行事化した状態で、より多くの回答・投票が得られるしくみを検討する。

リアルタイムアンケートに関しては、機能や使い勝手について使用者の意見を収集して対応する。

「学生FD」に関しては、学生の自主的な活動として軌道に乗るように支援する。以上

表1 授業改善のために学生の声を収集する手段と収集されるもの

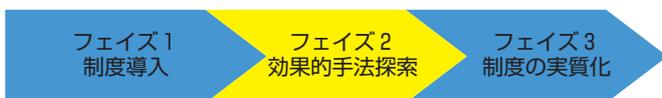
手段	実施タイミング	収集されるもの		学生の声を活用できるタイミング
		個々の学生から	集約された状態で	
授業評価アンケート	学期末	取り組み状況 ・感想（進捗、難易度、満足度、教え方、他） ・自由記述	・全体の状況	次年度の講義
表彰制度	年度末	・「一番よかった」と印象に残っている講義とその「よかった点」	・「一番よかった」という学生が多い講義、およびその「よかった点」 ・学生が「よかった」と評価する項目	講演会や授業参観などで内容を知った後
リアルタイムアンケート	任意（毎回の講義単位）	・講義の理解状況や感想	・全体の状況	次回の講義に反映できる
クリッカー	任意（講義の中）	・講義の理解状況や感想	・全体の状況	講義中に反映できる
学生FD	通年の活動	・学生間の意見交換や議論を通して発信された声（以下は立命館大の例） - 「おもしろい（興味・関心を引き、学習意欲を喚起する）授業」の紹介 - 「おもしろい講義の構成要素は何か」「教養教育とは？」などに関する議論の内容 （上記4手段では得難い学生の声の収集が期待できる）		webや冊子で報告を見た後

WG 2：ピア・レビュー制度の導入

リーダー 向原 強（先端経営学科）

WG 2は「ピア・レビュー」を担当するWGであり、平成21年度は、4人の教員（向原、坂本、梅津、大島）と事務職員1名（近藤）によって推進してきました。

WG 2はが発足した時点で、3つのフェイズに分けて推進していくことを掲げてきましたが、平成20年度の段階で、全員がこの制度に参画するという目標が達成されました。「制度の導入」というフェイズ1は完了したものと考えています。教員の皆さんにとっても、いい意味でも、悪い意味でも、すっかりこの制度は周知されたのではないのでしょうか。21年度からは、フェイズ2に入り、「効果的手法探索」の段階となります。



● 平成21年度ピア・レビューの概要

フェイズ1と基本は変わらないのですが、多少マイナーチェンジしました。平成21年度のピア・レビューの主な変更点は、以下の通りです。

平成21年度ピア・レビューの変更点

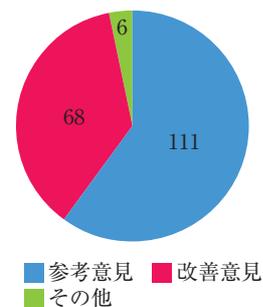
- 1) レビューグループを2名とする制約を緩和する。
- 2) 教養教員に関しては、学科横断型のレビューグループを作成し、専門のより近いグループとなるように工夫する。
- 3) 観察項目を設置して、レビュー報告書が書きやすくなるように工夫する。
- 4) ピア・レビュー留意点を配布する。

本学の取り組みは、テニユア・トラック制度のような人事評価とは無関係ですので、上から目線で同僚教員を評価しないように工夫する必要がありました。観察者と授業者の立場は対等であり、むしろ、ピア・レビューはノウハウを自分の授業に活用するという意味で、観察者のためにある制度といっても構わないと考えています。もちろん、授業者にとっても、自分の授業が密室にならなくなるわけですから、襟を正す効果も期待できます。

平成20年度のピア・レビューの反省点として、「ネガティブ意見が書きにくく、授業改善としての機能に対する疑問」をあげました。実際、平成20年度ピア・レビュー報告書において、もっとも多かった講義スタイルに関する185件の記述のうち、改善意見が68件に対し、参考意見が111件ありました。しかし、

観察者を主体として考えると、これは好ましい結果だったともいえます。むしろ、より多くの参考意見を吸い上げ、これを共有することも、ピア・レビューの重要な役割と考えられます。

講義スタイル(185件)



「対等な立場」という原理原則を明示するために、平成21年度のピア・レビューの実施要項には、次の「ピア・レビューの留意点」を加えました。

ピア・レビューの留意点

- 1) 参観者は授業者のいいところを発見し、自分の授業に活かすことを留意してください。
- 2) 授業の内容だけに集中しないでください。授業の環境作りも重要です。
- 3) 聞き手は、教員ではなく、学生であることに留意してください。
- 4) 参観者は今回みた授業が1/15であることに留意してください。
- 5) 授業だけでなく教室の環境にも留意してください。
- 6) 参観者が授業者を誉めることから始めてください。

ブレンストーミングの鉄則でもありますが、批判から出発すると、よいアイデアや意見はうまれません。この留意点を配布することで、授業改善のための優れたアイデアを引き出しやすくなることを期待しました。

平成21年度においてもピア・レビューの実施率は非常に高い結果となりました。特に後期は、報告書の提出が遅れた教員が何人かおりましたが、全教員による実施を達成することができました。

また、平成21年度後期より、FD支援システム（CANVAS）によるレビュー報告書の提出の試験運用を開始し、一部教員には協力していただきました。チュートリアルを用意したことや、これまでの報告書とフォーマットが同一だったこともあり、特に大きな混乱はなかったようです。

● 平成22年度に向けて

今年度（平成22年度）は、CANVASの本格運用が開始されます。全教員がCANVASによって報告書を提出する仕組みとする予定です。WG 2は、CANVASの運用支援に関して、貢献したいと考えています。さらに、報告書によって提出された情報の共有方法や活用方法について検討していきたいと考えています。

WG3：GPAとコンピテンシーの導入

リーダー 豊田 規人 (システム情報学科)

ワーキンググループ3 (以後WG3) は、GPAとコンピテンシーに関することを業務にしています。2009年度は、WG3の活動にとって一つの節目の年でありました。それは、2009年度から試行といえどもGPA制の開始にこぎつくことができたからです。このことは、表面上、GPAを算出したということだけにとどまらない大きな意味合いを持っています。つまり、GPA制が実行されたということは、学生の成績評価に総単位を基準にしていたことから、成績の質も問うことに学内で同意を得たと解釈できるからです。GPAをスタートさせたというのが最大の活動ですが、それに伴いいくつかの付随した活動も行いましたが、それらは以下のことです。

GPA実施に伴う2009年度の主な活動

- (1) GPAデータの解析
- (2) GPAに付随した制度の整備
- (3) GPAの活用法

(1) に関しては、学生のGPA、及び、各科目のクラスのGPの平均値(GPC)の解析を行いました。結果は教員のみならずWeb上で公開されています。特に、GPCの提示によって、同一科目などの成績の分散などの情報が、授業内容や成績評価に関して参考になると考えられます。

(2) に関しては、2010年度に向けて、従来の履修登録の変更制のほかに、履修登録の抹消期間を設定し、学生のGPAパフォーマンスを有効に引き出せる仕組みを作りました。又、評価点と、優、良、可、不可などのLGとGPの対応を表1のようにリファインしました。

表1. 評価点、LG、GP対応表

評価点	60点未満	60点～69点	70点～79点	80点～89点	90点以上
成績	不可	可	良	優	
GP	0	1	2	3	4

(3) のGPAの活用に関して、一定の道筋をつけました。GPAが実施されたばかりで、基礎データも集積していませんので、いきなり過度な活用は不可能です。又、注意すべき点は、GPAは成績に対する一基準にしか過ぎないため、この基準だけで色々なことを進めるわけにはいきません。特に、進級条件や卒業条件は、総単位数が基準になっているため、その点も加味しなくてはなりません。そういった状況下で、2009年度は、まず成績不振学生の指導の一部にGPAを役立てようということになりました。GPAデータを元に各教員の裁量で適切な指導を行うというものです。又、将来に向けての活用法も順次議論してきました。ST、TAの採用に関しては、学生の総取得単位数も考慮しなくてはなりません。更に成績優秀者や大学院進学資料に活用するためには、3～4年間のGPAデータの蓄積が必要になってきます。又、特に米国などの大学への留学を目指す場合には、GPAデータ付帯は必須のこととなるでしょう。これも英語力を加味し考慮しなくてはなりません。2009年度では、これらの導入について、一定の道筋をつけました。これらは順次活用されていく予定です。

更に、進学条件、卒業条件、GPAを斟酌したキヤップ制などの根幹に関する活用は、今回のやり方におけるデータの蓄積を基に、fGPAなども考慮し、目下のGPA制度をもう一段バージョンアップした段階で行うべきであろうと考えています。

まとめとしていえることは、これら2009年度の改変により、2010年度から、ほぼ本格的なGPA制が施行されることになったということです。

WG4：ICTの活用推進

リーダー 谷川 健 (システム情報学科)

1. WG4の使命

欧米では、ICT (Information and Communication Technology) やID (Instructional Design) を使って、効果的な講義を実施している例が多く見られる。本学を含めて、日本ではこれらの活用が遅れているが、多様な学生に対応した講義を行うためには、ICTやIDの活用が重要となる。本WGは、POLITEをはじめとしたICTの活用とIDの普及を推進するのが使命である。

2. 2009年度の取り組み

2.1 ICT・ID活動状況調査

教育の質の向上にICTやIDを有効活用するのが本学のFDの特徴の一つである。ICTの活用をICT活用レベルとして5つに分類した(表1)。また、「科目の前提知識を明示している」、「科目の学習目標を明示している」などのIDで重要な活動を7つあげ、これらの実践を目指している。本学のICTやIDの利用の現状を把握するために、2009年3月末時点のICTやIDの利用に関する調査を行った。この結果、ICT活用レベルは、レベル1以下の教員が7割以上であった。このことにより、本学の当面の目標である「全教員がICT活用レベル2になる」ことの妥当性が確認できた。ID活動については、何らかの形で多くの教員が実施しているとの認識を持っていることがわかったが、今後はID活動の質を高めていくことが求められている。

2.2 ICT・IDの利用促進

POLITE、クリッカの利用促進のために、eラーニング推進センターの分室を設置し、教員からの相談を受けやすいようにした。2009年9月と2010年3月にクリッカやPOLITEの利用報告や使い方などの研修会を実施した。クリッカの利用報告は、穴田先生と蔵本先生にお願いし、学生の理解状況を知るため

にクリッカの利用の有効性が示された。POLITEの利用報告では、長井先生、田中洋也先生、竹内先生、加藤先生にお願いし課題提出を使った学生のフィードバック収集の例などが示された。2009年3月には、POLITEを使った小テストの作成の講習会を実習形式で実施した。これらの研修会は、POLITEで公開しており、欠席した教員も受講できるようにしている。

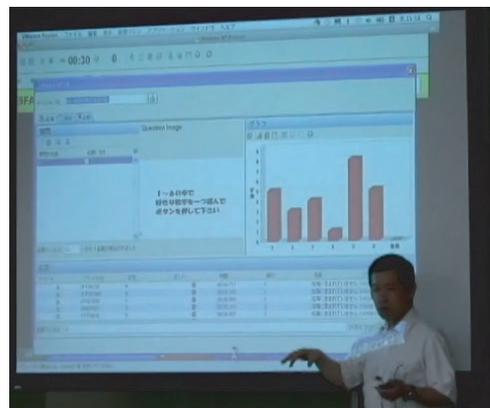


図1 研修会の様子

2010年3月で、26名の教員が71科目でPOLITEを利用している。クリッカは、2009年度前期に6科目、後期に8科目が利用された。

3. EDUCAUSE2009への参加

米国の高等教育機関におけるICT利用に関する学会であるEDUCAUSEの2009年度年次大会(2009年11月、米国コロラド州デンバー市)に参加し、多様化する学生への対応、クラウドやセカンドライフなどの新技術の動向、環境問題への取組などに関する知見を得た(教育GPニューズレター2009年Vol.4参照)。

4. 2009年度の成果と課題

2009年度は、研修会を3回開催し、POLITEを利用する教員も増えてきた。また、国際会議への参加により、有益な情報を得ることができた。一方、POLITEの利用に比べ、クリッカの普及がもう一つであるので、今後は、POLITEのさらなる普及とクリッカの普及を目指していきたい。

表1 ICT活用レベル

ID活用度レベル	活用形態	ICT
1	教材の提示(教える内容の可視可)	PowerPointなど
2	LMSを使った教材の提示、小テスト、課題提出 双方向性の授業展開(理解度の確認)	POLITE、クリッカ
3	授業内容のビデオ・オン・デマンド	LMS(POLITE)
4	擬似環境での体験学習	ゲーム、セカンドライフ
5	学習者適応型学習	POLITE

WG5：イベント運営・教育活動支援情報 リーダー サイモン・ソーラ (システム情報学科)

タスク

Working Group 5の目的はイベント運営・教育活動支援情報の提供です。新任教員研修、その他working groupの研修会、イベント等を支援する為のグループです。メンバーは各学科と事務職員から成り立っています (5+1)。

メンバー

システム情報	サイモン・ソーラ (リーダー)
医療情報	森 康一
先端経営	小西 二郎
情報メディア	島田 英二
事務	木田 洋, 近藤 始 (オブザーバー)

活動内容

平成21年度、最初の事業は、新任教員研修会でした。ベテランの先生から未経験者まで、男女の30代から60代までの新任教員が5人着任しました。Working Group 5で、最善の研修方法を検討した結果、ミニ講義の形式+グループディスカッションをすることに決めました。時間は約2時間で、講義とディスカッションを一時間ずつで行いました。

第1回 新任教員研修会

5月8日 (金) 16:15~18:15



内容

- ① イントロダクション
 - A 本研修会の目的について
 - B 新任教員への期待
- ② ミニ講演
 - A 「FDと教育GPについて」 富士 先生
 - B 「情報大学の学生について」 大橋 様
 - C 「学生支援センターから」 穴田 先生
 - D 「セクハラ・アカハラについて」 平子 先生
 - E 「教務・授業評価」 木田 様
 - F 「会計・研究費」 中田 様
 - G 「合鍵、電話番号、休み」 白井 様
- ③ ディスカッション
 - A 学生について思ったこと
 - B 今まで良かったと思うこと
 - C 学校にやってほしいこと
- ④ まとめとアンケート
クロージング 学長

ミニ講演講師を除く参加者は18名でした (新任教員5名+講師7名+WG5メンバー6人)。

第2回目の新任教員研修会を22年の1月28日に行いました。この時は、講義を設定せず、ビデオの上映、大学の歴史の話とグループディスカッションをしました。新任教員が後期から2人増えましたが、残念ですが参加人数は3人でした。

第2回 新任教員研修会

1月28日 (木) 16:00~17:30



内容

- ① 本学紹介のビデオの上映 (平成3年)
- ② 新しい本学紹介のビデオの上映 (平成21年)
- ③ 情報大の歴史についての話 (近藤副事務局長)
- ④ グループ・ディスカッション

グループ・ディスカッションは2008年の新任教員にアンケートをもとに行いました。アンケートのテーマ、「一年たっても、まだ分からないことは何」をディスカッションのテーマにしました。

他のWGによる研修会等の広報活動を行いました。



FD委員会のホームページの作成に向けて本学のFD関係のホームページを作りました。



WG 6：チュータ制度の導入

リーダー 竹内 典彦（先端経営学科）

平成21年度は、6人の教員（竹内、穴田、田中英、鈴木、和田、谷川）と事務職員2名（近藤、木田）によって構成された。

(1) チュータ制度のねらい

「北海道情報大学の人的資源である学生の持つ教育力を利用して、後輩の学生がより充実した学生生活を送れるように、学習を中心に支援する制度」である。

以下平成21年度の活動を時系列で報告したい。

4月

本学におけるチュータ制度は、優秀な先輩が後輩のよきモデルとなって、学習を中心とする様々な分野で指導することにより、後輩に良い影響を与えることを制度の大きな目的としている。

まずその先駆けとして、スタートアッププログラムで新入生向けに先輩の発表が行われた。項目は学習、資格、コンテストの取り組み等であった。

6月

チュータ制度の試行を後期から実施することに決定した。「数学」については「基礎数学」の再履修生を対象、「プログラム言語」については「プログラム言語Ⅱ」を対象、「英語」は「英語Ⅰ」、留学生は日本語教員や学生サポートセンターとも連携をとりつつ対象者をピックアップする。科目担当者にチューターとなる学生を選考してもらう

9月

資格チューターについても、医療情報学科で、後期から診療情報管理士試験対策チュータの試行を実施することになった。診療情報管理士試験対策講座・模擬試験を3年後期6講目（昨年は火曜日）に各教員により行っているが、この対策講座の中で、前年度合格者5名に入ってもらい3回に分けて試験対策チュータを依頼する。

(2) チュータ制度の規程について

チュータ制度の規程が整備され、平成22年度より施行されることになった。

12月

学習チュータ試行の効果と課題

- ・学習のモチベーションが上がった（数学、英語等）
- ・プログラム言語の学生チュータから「この制度はとてもよい。このままやめるのはもったいない」という声。
- ・学力の一番下の層の指導は難しい（指名しても欠席がち）。むしろその上の層が、意欲もある者もいて、この制度の対象者になりやすい傾向がある。一番下は教員の指導を基本とする。
- ・マンツーマン的な教え方がよい（多対多の状況でも教えるときは1対1）

留学生チュータ試行の結果

留学生は、いずれも学力が向上し、学習姿勢も改善され、正規の授業にも積極的に参加するようになった。特に①の学生は、ゼミや専門科目への取り組み姿勢に問題が見られたが、チュータが授業に真面目に取り組む姿勢に触発され、授業態度が大幅に改善された。また、当初週2回だったレッスンも、週3回に増やしてほしいとの申し出があった。

聴講生、チュータ、いずれにとっても非常に満足度の高いものとなっている。聴講生は日本人学生に接する機会がなかったため、日本語を駆使して会話をし、大学生活、進路、学部情報、日本人の友人の作り方、趣味等、積極的に質問をしていた。チュータも、聴講生と交流ができたことに、大いに満足していたようである。

資格チュータ試行の結果

診療情報管理士試験対策

担当：中林先生 5名のチュータ

3年生には参加の強制は難しい。2年生のモチベーションを上げるのに効果があった。中間レベル以下の学生の出席を促し、モチベーションを高め50%以上の合格率にしたい。

(3) WG 6主催のフォーラムについて

各チュータ担当教員に発表していただいた。

日時：2010年3月11日（木）午後3時～4時半
場所：新館119号室

発表者・内容：

- ・学習チュータ：穴田（数学）、谷川（プログラム言語・メディア技術演習）、竹内（英語）
- ・資格チュータ：中林
- ・留学生チュータ：飯嶋
- ・出席者約20名
（詳しくはニューズレターNo.4参照）

WG7：ファカルティポートフォリオの導入 リーダー 山北 隆典 (情報メディア学科)

2年目を向かえメンバーも一部入れ替わり、4月17日のミーティングより活動に入りました。

WG7の構成メンバー

遠藤雄一 (先端経営学科)
長尾光悦 (システム情報学科)
小山芳一 (医療情報学科)
安田光孝 (情報メディア学科)
山北隆典 (情報メディア学科)
近藤 始 (事務局)

した。最終年度の実運用の中でのブラッシュアップを予定しています。図2にシラバス入力画面例を示します。



図1 CANVASの画面例

1. WG7のミッション

WG7に与えられたミッションはファカルティポートフォリオの導入 (含む、シラバス) となっています。

平成21年度の具体的な作業目標として次の2項目を設定しました。

1つ目はFD支援システム (CANVAS) のモニターとして試用に参加し、システムの品質向上に寄与するとともに、ファカルティポートフォリオとして管理すべきデータやその管理方法を改善していくことです。

2つ目はシラバスとして学生に提供すべきデータを識別し、CANVASに実装して使用することを視野に新しいシラバスを検討することです。

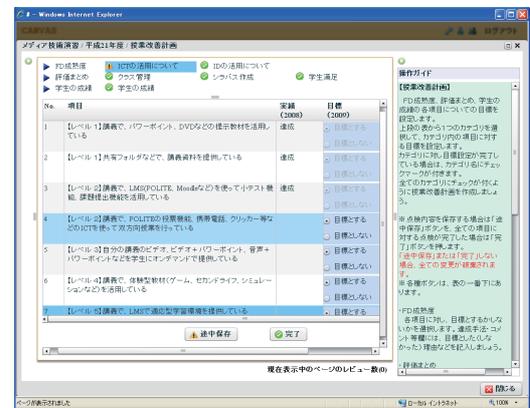


図2 シラバスの入力画面例

2. 活動実績

毎月の定例ミーティングは以下の日程で実施しました。

ミーティングの実績

4月17日 (金)、5月22日 (金)、6月12日 (金)、
7月10日 (金)、8月25日 (金)、10月23日 (金)、
11月27日 (金)、12月15日 (金)、1月15日 (金)、
2月16日 (火)、3月25日 (木)

(1) FD支援システムのモニター実施

前期は、CANVASの第1次モニター試験にWG7の代表としてリーダーが参加しました。後期はグループメンバー全員がCANVASの第2次モニター試験に参加した。図1にCANVASの画面例を示します。

(2) 新しいシラバスの提案

前年度に見送った新しいシラバスの提案ですが、再度内容を吟味し、学生の予習復習に役立てる情報を提供する機能に絞った拡張を提案し、CANVASに組み入れることができ

3. 海外視察

リーダーが平成21年9月13日 (日) ~18日 (金) の日程で、米国の3つの大学のFD活動を視察に行きました (図3参照)。専門家が率いるFDセンターの充実ぶり、様々な分野の研修の実施など、FD先進国であることを実感しました。しかし、FD活動に対する教員間の温度差やICTの活用度合いには本学との大きな差は感じられませんでした。WG7の視点からは、本学の取り組みに見られるような、FD活動そのものにICT積極的に取り入れて、授業改善のためのデータを組織的に集約し活用している大学はありませんでした。本学の取り組みは特徴的なものであると実感できました。



図3 米国視察の様子

WG8：カリキュラムディベロップメント

リーダー 富士 隆（教務部長）

WG8のミッション

我が国のFDは、主に授業の改善にフォーカスされているが、本学のFDは、カリキュラムの見直しまで含めて活動している。現行のカリキュラムが、社会のニーズや情報技術の進展に適切に対応しているかを、主に企業における経営、情報、メディア及び医療等の分野で高い識見と経験を有する外部アドバイザーの方々にレビューしていただき、時代を先取りしたカリキュラムの開発をミッションとしている。WG8の活動は、先端経営学科長、システム情報学科長、医療情報学科長、情報メディア学科長、教養部長、事務局長、教務課長の教職員のメンバーによって支えられている。超多忙な集団なので、会議はいつも夕方6時から開催している。

主な活動内容

平成21年度は、外部アドバイザーのレビュー結果に基づいて平成23年度カリキュラム案を作成した。そして、カリキュラム・アドバイザーボード会議を前期と後期に各々実施し、その原案をレビューしていただいた。

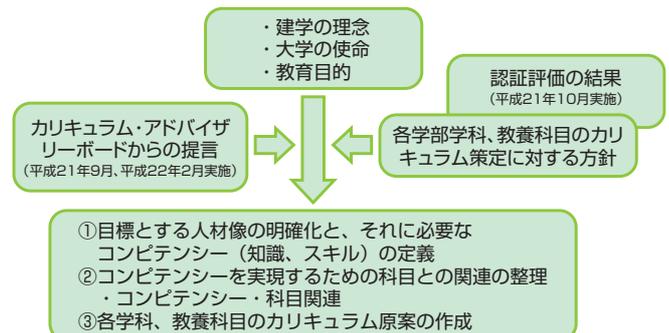
外部アドバイザーのメンバー一覧

分野	氏名	勤務先等
経営	武田 安正	アクセンチュア株式会社 代表取締役副社長
	関口 恭毅	北海道大学名誉教授 情報経営学研究所所長
情報	明神 知	株式会社オービス総研ソリューション開発 本部 エクゼクティブフェロー
	福井 素子	日本アイビーエム株式会社 執行役員 サーバー・システム・オペレーションズ担当
医療	中谷 純	東京医科歯科大学 情報医科学センター准教授
	石井 友二	ホワイトボックス株式会社 代表取締役
メディア	佐々木邦俊	株式会社デジックプロジェクト 3 LMedia事業部 参与
	高橋 昭憲	株式会社データクラフト 代表取締役
教養	横山 憲治	北海道テレビ放送株式会社 取締役 放送番組審議会担当 ・CSR推進室長



カリキュラム見直しの基本方針は、建学の理念や大学の使命等から「目標とする人材像と、それに必要なコンピテンシー（知識・スキル）」を明らかにし、そのコンピテンシーを実現するために必要な科目を決めることとした。この基本方針のもと各作業は、各学科と教養協議会で進められ、その中で、外部アドバイザーからの提言や認証評価での指摘事項（CAP制への対応等）などを取り込みながら原案を作成した。

カリキュラム見直しの基本方針



外部アドバイザーからのコメントで、各学科共通の内容で主なものは、次の通りである。

- ・学ぶ気力や学問に関する興味強化
- ・基礎学力の向上
- ・問題発見、分析、解決能力の養成
- ・コミュニケーション能力の養成
- ・英語力の強化
- ・情報倫理、企業倫理等の倫理教育
- ・主体的、自律的学習を中心とする教育方法
- ・集中力、繰り返しを考慮した授業時間の配分

今後の活動

平成21年度の成果物である平成23年度カリキュラム案は、平成22年度に教務委員会を経て学部教授会で審議されながら、平成23年度から実施されることになる。

WG9：教育アドバイザー制度の導入

リーダー 中村 鎮雄（システム情報学科）

本学に入学した1年生が大学生活に慣れるまでに、様々な問題に直面する可能性があります。

そのような問題は、大学の環境やルールに不慣れな新入生に特に現れやすい傾向があるので、WG9では、1年生をサポートする教育アドバイザー制度について検討してきました。その結果、平成22年度に本制度を試行することになりました。

教育アドバイザー制度の目的は、新入生に対し相談すべき教員（教育アドバイザー）を明確にして、新入生が大学生活を送る上で助言が必要などときには、教員に相談できる体制を作ることにあります。教育アドバイザーは、8名前後の1年生の相談相手になるので、多人数のクラス担任制度を補完することにもなります。本制度の成案を得るまでに、部会やFD委員会、各学科等で活発な意見交換をしてきましたが、試行を通して本制度の目的が達成できることを期待しています。

平成21年度の活動メモ

第1回 4月17日

オウンティーチャー制度の今までの取組について
(竹内先生)

第2回 5月22日

金澤工業大学視察報告：初年次教育について
(広奥先生)

第3回 6月18日

初年次教育の考え方や学習支援について(穴田先生)

第4回 7月17日

1年次を対象とするオウンティーチャー制度の実現可能性について
教員の負荷の問題、教養と専門の関係、現行制度との整合性という問題。

第5回 7月24日

オウンティーチャー制度の役割と方向性について
クラス担任の役割とオウンティーチャーの役割分担について議論。
主な問題点：役割の曖昧性、既存制度との重複性、教員の負荷の問題。

第6回 9月10日

- (1)オウンティーチャー制度に関する座長試案について意見交換。試案に対し意見交換を行ったが、纏まらなかった。
- (2)北見工大で開催された「学生支援GPシンポジウム」の報告

2009年9月14日

FD研修会において講演者から「オウンティーチャー制度」についてコメントがあった。

第7回 10月17日

オウンティーチャー制度の方向性について

1年生の担任制度と並行してオウンティーチャー制度を設置し、負荷の少ない形で実施するという方向性が決まる。

第8回 11月17日

- (1)教育GP推進協議会からFDWG9に寄せられたコメントについて
- (2)他大学の取り組みについて(豊田先生から東京情報大学と桜美林大学の報告)
- (3)座長案を引き続き検討した。

第9回 12月8日

「オウンティーチャー」の名称変更について
オウンティーチャーの役割例示について

第10回

オウンティーチャー制度の方向性について

第11回 2月15日

- (1)「オウンティーチャー」の名称変更について「オウンティーチャー」の代わりに「教育アドバイザー」とすることが決まる。
- (2)2月の学科会議説明資料に対するFD委員会の意見を報告
- (3)学生との顔合わせ時期について
- (4)2月の各学科会議において試行案についてヒアリングすることになった。

第12回 3月1日

- (1)教育アドバイザー制度の試行案に対するFD委員会(2/28)の意見を報告。
FD委員会では異論も出たが、「各学部教授会の承認を経た上で1年間これを試行する」ことが承認された。
- (2)1年生のクラス担任を教育アドバイザーの配置から外すという修正提案について議論。
- (3)WG9として意見調整を行った。
- (4)スタートアップ時の対応について議論。

2010年3月4日

臨時のFD委員会において、WG9の試行案を議論し修正案が承認された。

- ①1年生のクラス担任(16名)は、クラス全体を見ているので教育アドバイザーの担当から外すという表現になった。
- ②学生に対して教育アドバイザーの存在を、学科ガイダンスで説明することや、学生が教育アドバイザーと面談する機会をStart-Upプログラムに入れることになった。
- ③学部教授会には議題として提出することになった。

2010年3月5日

第2回教育GPフォーラムにおいて、WG9の活動報告を行った。

2010年3月

両学部教授会において、試行案が承認された。

WG10：リメディアル日本語教育の検討

リーダー 平子 玲子 (情報メディア学科)

WG10の任務は本学学生の日本語能力を高めるためには、カリキュラムの内容や学習支援の体制にどのような改善が必要なのかを検討することでした。1年間の期限で、2009年2月に発足し、2010年3月に活動を終わりました。この間の活動を報告します。

I 学生の現状の把握

委員となった11名の教員が指摘するのは、漢字能力の低下、テニオハが正しく使えない、主語述語が整合した文章が書けない、読解力不足、要約力不足、抽象的思考力の不足、論理的思考ができないなどでした。結果としてレポートが書けない・延いては卒論が書けないという現状が出されました。

II 新カリキュラムによる日本語教育の検証

2003年度から実施された新カリキュラムにおいては、日本語能力向上のため「文章表現法」「ビギナーズセミナーⅠ・Ⅱ」という科目が設定されました。また追って「コンピュータリテラシー」という科目も設けられ、担当教員によって日本語能力を向上させる努力が少なからず行われてきました。「読む・書く・聞く・調べる・話す」のトレーニングを目標にしてきたわけですが、必ずしも効果があがっていないことを認めざるを得なかったのです。そこでこれまでの教育実践から継承するものは何か、欠けていたものは何かを検討する作業を開始し、月1回のペースで会議を持ち検討を重ねました。

III リメディアル日本語教育の現状

大学のユニバーサル化のなかで世界的にリメディアル教育・初年次教育が叫ばれてきているが、日本語教育は効果が目に見えにくいこともあり、緒についたばかりである。これという決め手はなく、試行錯誤がなされているということが、文献収集から見えてきました。

IV 他大学の実践から学ぶ

2009年9月には日本リメディアル教育学会第5回全国大会に参加し、1人当たり7-8個のパネルに参加して他大学の実践を聞き学びました。さまざまな取り組みが全国の大学で行われていることがわかり、貴重な情報を得ました。このつながりが縁となり、

教材提供をしていただいた大学もあります。またプレースメントテストの可能性・学習教材の情報も得ることができ、委員にとっては貴重な経験でした。

V 先進校に学ぶ

2010年1月に関西の大手前大学を訪問し、日本語教育の授業を見学しました。また教材・クラス編成・スタッフ配置・スタッフ会議・学生支援などについて詳細な情報を得ることができました。

VI 結論

検討を重ねて来た結果、得た結論を記します。

1) 習得すべき日本語能力

- ①原稿用紙の使い方 (書写) 音読 漢字の読み調べ ことばの意味調べ
- ②文章の要約 書き言葉と話し言葉 文体の統一
- ③資料の使い方 (引用・禁止事項・参考資料の示し方)
- ④感想を書く きちんと自分の意思を伝える 敬語を使う
- ⑤論理的な文章を書く～概略・構成・接続語・区切り・段落・主語述語
- ⑥情報検索・情報収集 プレゼン作成 プレゼン
- ⑦学びの姿勢・notetaking

2) 教育を実践する体制について

- ①日本語教育の効果をあげるには少人数クラス編成が必要 (20名前後、理想的には15名) である。非常勤講師 (ポスドク) の活用などを検討する。
- ②統一した授業計画・教材・担当者の打ち合わせが必要である。
- ③到達目標を明確にしてICTの利用を考える。
- ④授業以外で学生の学習をサポートする支援体制が必要である。チューター制、学習支援センターなど、現在のしくみでは日本語教育に対処できない面があり、別の仕組みを作る必要がある。
- ⑤そのためには日本語教育にたずさわるスタッフの増員が必須で、専任教員の配置が望ましい。
- ⑥本学の学生の現状を把握するために日本語プレースメントテスト実施を検討する。

3) 科目編成について

「文章表現法」に代えて「日本語表現法Ⅰ」「日本語表現法Ⅱ」とし、「ビギナーズセミナーⅠ」「ビギナーズセミナーⅡ」と同時に1学年で展開し、初年次に日本語能力をつけることに力を注ぐべきである。

F D活動 行事（実績・予定）

日 程	行 事
3月 5日（金）	教育G Pフォーラム
3月 5日（金）	平成21年度 第2回教育G P推進協議会
3月11日（木）	「学生による学習支援」（チュータ）フォーラム
3月12日（金）	学生F D 成果報告会（WG1）
3月16日（火）	ICT研修 ICT活用報告—POLITEおよびクリッカの利用—
3月23日（火）	ICT研修 POLITE活用Hands On小テスト問題の作成を学ぶ
3月31日（水）	第12回 F D委員会・F D推進連絡会議
4月 6日（火）	「～学生が選ぶ～教え上手な先生」表彰 表彰者：坂本秀樹先生
4月 7日（水）	教育アドバイザー制度実施 学生との面談開始
4月19日（月）	チュータによるピアサポートルーム開設（図書館内）
4月20日（火）	学生F D ミーティング（WG1）
4月28日（水）	平成22年度 第1回 F D委員会・F D推進連絡会議
5月 6日（火）	自習室開設 202教室
5月11日（火）	平成22年度前期 ピアレビュー開始
5月13日（木）	学生F D 22年度実績最終報告（WG1）
5月25日（火）	「～学生が選ぶ～教え上手な先生」 坂本先生講演会
5月26日（水）	第2回 F D委員会・F D推進連絡会議
5月27日（木）	平成22年度 前期 新任教員研修会
6月30日（水） 予定	第3回 F D委員会・F D推進連絡会議
9月10日（金） 予定	カリキュラム・アドバイザーボード会議

F D委員会WGの活動実績

WG名	ミーティング
WG1（学生による授業評価アンケート）	3月10日、3月15日、5月18日
WG2（ピアレビュー制度の導入）	3月15日、4月15日、5月17日
WG3（GPAとコンピテンシーの導入）	3月18日、4月22日、5月20日
WG4（ICTの活用推進）	3月16日、5月20日
WG5（イベント・教育活動支援情報の企画）	4月23日、5月16日
WG6（チュータ制度の導入）	3月15日、4月14日
WG7（ファカルティ・ポートフォリオの導入）	3月25日、4月21日、5月19日
WG8（カリキュラム・デベロップメント）	3月10日、4月14日、5月12日
WG9（Own Teacher制度の導入）	3月 1日、4月19日、5月21日
WG10（日本語リメディアル教育検討）	3月16日 22年度で活動終了

編集後記

本学における本格的なF D活動も3年目を迎えました。POLITEの利用は着実に増えており、ICTを生かした教育の質の向上への取組も次第に定着しつつあると思います。F D活動の中心となるF D支援システムCANVASの本格的運用もこの4月から始まりました。CANVASの活用が軌道に乗り、ICTやIDを利用した教育の質の改善を実現し、本来の目的である学生をNurtureする（大切に育てる）ことができると願っています。